

製鉄記念室蘭病院 道内初

カプセル内視鏡導入

大腸用 患者の苦痛を軽減

製鉄記念室蘭病院が導入した大腸用カプセル内視鏡の模型



【室蘭】室蘭市の製鉄記念室蘭病院は12月から、口からのみ込んで大腸の状態を診断する「カプセル内視鏡」

による検査を実施する。患者の苦痛がなく腫瘍などを確認できる。同病院によると、大腸用のカプセル内視鏡導入は道内初という。

カプセル内視鏡はイストラエル製で長さ31・5ミ、直径11・6ミ。バッテリーと腸の内部を照らす発光ダイオード(LED)、カプセルの両端にカメラを内蔵している。最高で毎秒35枚撮影し、患者の腰に着けた記録装置にカラー画像のデータを

送る。医師が画像を見て腸内の状態を診断する。カプセルは回転しながら移動し、腸内をくまなく撮影できるという。厚生労働省の中央社会保険医療協議会が、このカプセルでの検査を医療保険の対象とすることを承認しており、来年1月から適用される。検査費用は現在約10万円かかるが、保険適用後は3割負担で、約3万円になる見込み。

大腸内の診断は通常、肛門からチューブ状の内視鏡を入れ、患者から「恥ずかしい、怖い」などの声がある。同病院消化器・血液腫瘍内科の前田征洋副院長（日本カプセル内視鏡学会指導医）は、「大腸がんでの死亡率は男女とも高い。患者の不安を和らげ、早期発見につなげたい」と話す。問い合わせは同病院経営企画課 ☎0143・47・4404 へ。